

北京大学図書館蔵馬氏不登大雅文庫旧抄戯曲「金瓶梅」についての一所見

荒 木 猛

〔抄録〕

従来戯曲「金瓶梅」と言えば、「古本戯曲叢刊三集」に収められた鄭小白撰と称せられる二巻三十四出のものをさした。しかし最近中国の学苑出版よりかつての北京大学教授馬廉氏旧蔵の戯曲が影印出版され、その中に二種の戯曲「金瓶梅」の抄本が収録されていた。

本稿は、このうちの二巻三十四出本について、この戯曲が基づ

いた「金瓶梅」の版本、他の戯曲「金瓶梅」との関係、欠けている部分の推定さらには戯曲化するにあたって見られる特色・作者鄭小白等について初歩的考察を行ったものである。

キーワード 馬氏不登大雅文庫、戯曲「金瓶梅」、鄭小白

はじめに

最近、中国の学苑出版というところから、かつての北京大学の教授で戯曲小説の研究者であった馬廉氏の蔵書の一部が、「不登大雅文庫蔵珍本戯曲叢刊」として刊行され、その中に、撰者不明の戯曲「金瓶梅」の抄本が二部収録されていた。

従来、戯曲「金瓶梅」と言えば、かつて鄭振鐸らが収集編刊した「古本戯曲叢刊」三集所収で、鄭小白撰と称せられる二巻三十四出本

(以下これを「古本戯曲本」と略称する)のみをさしていた。だがこの度、馬廉氏旧蔵の戯曲が影印刊行されたことにより、戯曲「金瓶梅」は、「古本戯曲本」の他に何種類か現存することがわかった。

この「不登大雅文庫蔵珍本戯曲叢刊」に収められた両種の戯曲「金瓶梅」は、一は、二巻二十八出本(以下これを「不登大雅甲本」と略称する)で、うち、一出・二出・十四出・二十三出の都合四出がすでに散失している。

また別の一本は、僅かに十出のみのもの(以下これを「不登大雅乙

本」と略称する）である。従って、「不登大雅」の甲本も乙本も完全なものではなく、ともに残欠本である。

今回は、このうちの「不登大雅甲本」について、二、三調べ得た知見について指摘したいと思う。

一 現存する各戯曲「金瓶梅」相互の関係について

実は、現在、中国芸術研究院戯曲研究所資料室にも、別に戯曲「金瓶梅」の清・乾隆年間の抄本が二種存在するという。

従って、現在のところその存在がわかっている戯曲「金瓶梅」を一覧すると、左のようになる。

一、「古本戯曲叢刊」三集所収二卷三十四齣本（古本戯曲本）

二、「不登大雅文庫蔵珍本戯曲叢刊」所収二卷二十八出本（不登大雅甲本）

三、「不登大雅文庫蔵珍本戯曲叢刊」所収十出本（不登大雅乙本）

四、中国芸術研究院戯曲研究所資料室所蔵二十七出本（以下これを「芸戯研甲本」と称する。）

五、中国芸術研究院戯曲研究所資料室所蔵十四出本（以下これを「芸戯研乙本」と称する。）

このうちの一の「古本戯曲本」については、かつて澤田瑞穂氏に、「随筆金瓶梅」なる一文があり、その中で、この「金瓶梅伝奇」が紹介され、

「物語は第二折の『十友結拜』から始まっているので、やはり清代

に通行した第一奇書本を底本として脚色したものらしい。しかし物語

の展開は、単に『金瓶梅』だけをたどったものではなく、全体の約三割か四割にわたって『水滸伝』の人物が登場する。（中略）全三十四

折のうち、上巻第十一折の『金蓮誘叔』―潘金蓮が酒にかこつけて武松を誘惑しようとする場面や、下巻第一折から第五折までの武松毒殺

と亡霊出現のあたりは、かなりおもしろく構成されているが、あまり頻繁に水滸系の武劇を挿んで場面を転換させるため、どうしても構成

上の緊密なまとまりと劇の雰囲気とが壊され、お手軽で雑駁だとの印象を受ける。せっかく『金瓶梅』を劇化しながら、あまり水滸劇にと

らわれて、ちぐはぐな失敗作に終わっている。」と指摘し、また更に、

「この伝奇は上下の二巻にわかれ、上巻に十六折、下巻に十八折、計三十四折のかなり長いものである。しかもそれで完結したわけではな

く、最後の第十八折『東京寇劫』は梁山泊の首領宋江が部下を率いて東京開封さして攻めのぼるところで、全篇の構成から見ると、途中で

ふっと切れた感じである。それに、第一折の『禪師現宗』で普静禪師という老僧があらわれてこの劇の梗概を述べているのによると、西門

慶急死後の西門一家の没落まで書きつづける計画であつたらしい。また下巻の末尾に『金瓶梅式卷終』としているのも、第三卷・第四巻と

書き継いで完結させる予定だったことを示している。」とし、この戯曲も未完の戯曲で、しかも「金瓶梅」と「水滸伝」のないまぜ劇であつたことが指摘されている。

ところが、今回刊行された両種の「金瓶梅」戯曲は、これと大部異なる。「不登大雅甲本」は、西門慶が李瓶児と密通し、これを第六夫

人として迎え入れるところから始まり、西門慶が死亡するところで終つていて、終始一貫「金瓶梅」からの話のみ、内にいささかも水滸系の武劇は挿まれてない。また「不登大雅乙本」も、潘金蓮が第六夫人として西門家に入るところから始まって、武松に殺されるまでのことが書かれていて、やはり「金瓶梅」からの話で終始し、うちに水滸系話柄を挿んでない。まず、このことからしても、「古本戯曲本」と、「不登大雅甲本・乙本」とは別の戯曲であることが判る。では、「不登大雅甲本」と「不登大雅乙本」の関係はどうであろうか。

「不登大雅甲本」と「同乙本」とでは、ほぼ内容が重っている齣が次の表のように三ヶ所ある。

不登大雅甲本	不登大雅乙本	小説「金瓶梅」
第三齣 密約	跳墻	十三回
第四齣 気喪	露情	十四回
第九齣 懷嫉	吃酸	二十回
第十齣 私語	鬧架	二七回

※IIは、内容がほぼ同じ、Iは、内容が大体一致していることを示す。試みに、「不登大雅甲本」第三齣密約と、「同乙本」の跳墻の最初の部分を比較してみると、左のようになる。

不登大雅甲本	不登大雅乙本
第三齣 密約	跳墻

(秋葉香) 且上 未必瑤台飛下。謬相誇閉月羞花。嬋娜堪憐韻堪画。比露浥芙蓉未假。
 (浣溪紗) 映水芙蓉一笑開。斜飛宝鴨襯香腮。眼波纔動被人猜。一面風情深有韻。半箋嬌恨寄幽懷。月移花影約重来。
 奴家李氏。生時有人送玉瓶一个。因此小字遂喚瓶兒。雖不敢說月貌花客。也畧解些雲情雨意。昔作梁中書之妾。今為花子虛之妻。論起來年貌到也相當。只可恨他性情浮浪。喜得隔壁西門官人生得風流俊雅。迥出尋常。向奴屢次勾挑。一時遂成密約。溫柔軟款甚是多情。奴家若嫁得此人。便心滿意足了。一向總在墻頭往來。故此機閑不露。這幾時未曾相會。心中甚是鬱々。今早花郎又到妓女家去了。正待乘空。約他過來。不意花郎有幾個弟

占 艶粧扮李瓶兒上

(秋葉香) 未必瑤台飛下。謬相誇閉月羞花。嬋娜堪憐韻堪画。比露浥芙蓉未假。
 (浣水詞) 映水芙蓉一笑開。斜飛宝鴨襯香腮。秋波纔動被人猜。一面深情風有韻。半箋嬌恨寄幽懷。月移花影約重来。
 奴家李氏。父母生我時有人送玉瓶一对。遂喚瓶兒。雖不誇月兒花客。也解些雲情雨意。昔作梁中書之妾。今為花子虛之妻。論他年几到也相當。怎奈他情性浮浪湊家。鄰家有個西門官人生得風流俊雅。向奴屢次勾挑。一時遂我密約。溫柔軟款甚是多情。奴若嫁得此人。一日便心滿意足。以着迎春約他跳墻相會。只待黄昏拋磚為号。專等他來便了。

兄。為家財分受不均。東京告下状来。差人将他就從歌院裡捉拿去了。寄信回来教我尋人情救他。我正好借此名色。請西門官人過來計較一個長策。方纔叫迎春將桌兒靠牆放了。只待黃昏拋磚為号。好待他来也。

これによっても判る通り、乙本で若干省かれている部分があったり、一部の文字に異同があるものの、この両種の抄本はほぼ同一の戯曲のそれぞれ一部であることがわかる。また、乙本は甲本と比べて、例えば最初に李瓶児が登場する所で、「占 艶粧して李瓶児に扮して登場する」という風に往々登場する役者の動作を指定している。この「不登大雅文庫蔵珍本戯曲叢刊」の第一冊冒頭にかかげられた北京大学図書館館長の戴龍氏による序によると、「不登大雅甲本」は、李瓶児を主人公とし、構成が整っていて曲詞も典雅であり卑猥なところもないので文人の手によるものだろう。これに対して「不登大雅乙本」は、芸人が「不登大雅甲本」を改編増飾して作った演出本であろうという主旨のことを書かれているが、これは的を得た指摘かと思われる。

では、中国芸術研究院戯曲研究所資料室所蔵の二種の戯曲「金瓶梅」、つまり「芸戲研甲本」と「芸戲研乙本」は、「不登大雅本」と如何なる関係があるものであろうか。

実は、筆者はまだこの両種の戯曲を見ていないので明確なことは言えない。しかし幸いなことに、郭英徳氏の「明清伝奇綜録」（一九九七年、河北教育出版社刊）巻二鄭小白の条にこの「芸戲研甲本」と「芸戲研乙本」それぞれの齣目が紹介されているので、おおよその劇の筋をたどることができる。このうち「芸戲研乙本」は、次にかかげるように「不登大雅乙本」と極めて齣目が似ている。恐らく、同じ戯曲の演出本を書き取った別の一抄本かと思われる。試みに、「芸戲研乙本」と「不登大雅乙本」の齣目を対照すれば、左記の通りとなる。

「芸戲研乙本」	「不登大雅乙本」
納妾 聞殺 出罪 跳墻 露情 跳判 孽鏡 解到 托石 奪林 吃醋 鬧架	納妾（〃） 聞殺（誤殺） 審問（出罪） 跳墻（〃） 露情（〃） 跳判（〃） 孽鏡（〃） 吃醋（〃） 鬧架（〃）

成親
殺嫂

成親殺嫂（一）

これによっても判る通り、「芸戲研乙本」と「不登大雅乙本」との違いは、前者が後者より僅かに「解到」「托石」「奪林」の三齣多いだけである。これは実際に見てみないとわからないが、齣目の字面だけから判断して、「奪林」とは武松が流罪先の孟州で施恩のたのみをうけて快活林という施の縄張りから蔣門神を追い出した「水滸伝」二十八・二十九回あたりの話を劇化したものと思われる。もしそうだとすると、この「芸戲研乙本」ならびに「不登大雅乙本」は、まったく「金瓶梅」だけで終始一貫した劇ではなく、うちに若干「水滸伝」の要素も含まれていたのかもしれないことが推察される。

さて「芸戲研甲本」は、郭英徳氏の紹介によれば、李瓶児の病死・西門慶の死と呉月娘の出産、春梅が周守備に嫁ぎ、武松が金蓮を殺害、陳経済が妻の西門大姐を自殺に追いつめ、李嬌児と孫雪娥の相い継ぐ逃亡、そして陳経済と春梅の姦通と、彼等が死に至るまでのことが劇化されており、うちに、「水滸伝」中の武松による飛雲浦や十字坡での活躍の一般も挿入されているという。そして齣目として、説親・雪誘・驚児・襖解・病囑・遇赦・慶捐・軀胎・乖義・破蒸・殺嫂・鬧浦・改装・上山・逼妻・控濟・托行・盜財・岳廟・婦訝・奸逃・設計・賺松・訪舅・重逢・竊聽・金横の二十七齣を挙げている。

これによって見るならば、「芸戲研乙本」や「不登大雅乙本」が比較的「金瓶梅」の初めの部分に取材するのに対し、この「芸戲研甲

本」は「金瓶梅」の後半部に取材するものようである。この「芸戲研甲本」が「芸戲研乙本」や「不登大雅乙本」と重なるのは、武松が兄嫂にあたる潘金蓮を殺す段と思われる「殺嫂」の齣だけである。

この両者の間に何か関係があるかないかは、実際に見ていないので何とも言えないが、どちらも二字の齣目であることから、ひよつとして同一抄本のそれぞれ一部ずつで、両者は互いに補完しあう関係にあるのかもしれない。

この中国芸術研究院所蔵の二種の戯曲「金瓶梅」については、将来これを見る機会を得てから再び論ずることとして、次章では「不登大雅甲本」について、少し論じてみようと思う。

二 「不登大雅甲本」について

(一) 各齣の梗概

この本の考察に入るに先だち、論述の必要上、この「不登大雅甲本」各齣の梗概をしるしておきたい。

一齣二齣は、欠。

三齣密約 花子虚不在の時をねらって妻の李瓶児が隣家の西門慶と密会し、その際、今、夫が兄弟から親からの財産の分与の件で役所に訴えられていることを話す。西門慶は善処を約束す。

四齣氣喪 花子虚は西門慶の計らいで出獄したものの、財産の大部分がなくなっているし、妻の李瓶児の自分に対する態度の冷たさも手伝って、遂に悶死してしまう。

五齣擅恩 所は都の太師の蔡京邸。時は蔡京の誕生日の六月十五日。

この日蔡京のもとには親族のみならず都や地方の大小の役人達が名刺をもって祝いにかけてつけ太師邸は賑いを極める。そこへ執事の翟謙が現われ、太師に山東清河県の西門慶なる者から誕生祝いの品が届いたことを報告する。すると蔡太師はいたく喜び、西門慶には山東提刑所副千戸の職位を、また金品を届けた番頭の呉典恩には清河県丞の職位を与える。

六 齣 許嫁 西門慶は花子虚が亡くなってからすぐに李瓶児を娶る予定であったが、都の親戚筋に当る人が弾劾された為蟄居閉門の身になり、しばらくは李瓶児の件も沙汰やみとなっていた。なにも知らない李瓶児は懊悩のあまり病気にかかり、これを治してくれた医者蔣竹山と結婚してしまう。

七 齣 邏打 李瓶児が蔣という医者と結婚したことを知って怒った西門慶は、魯華と張勝という二人のやくざを使って嫌がらせを行わせ、李瓶児に蔣竹山と手を切らせる。

八 齣 懷感 結局李瓶児は西門家に嫁ぐが、西門慶はなかなか彼女を許そうとせず冷たくする。しかし、そのうち李瓶児のしおらしさにほだされ彼女のことを愛しく思うようになる。

九 齣 懷嫉 日を追って西門慶の李瓶児に対する寵愛が深まってゆくと、潘金蓮が瓶児に強い嫉妬心を懐くようになる。

十 齣 私語 ある日、李瓶児が西門慶に子を見ごもったことを打ち明けるが、このことを潘金蓮に盗み聞かれてしまう。

十一 齣 加官 李瓶児が男の子を出産する。同じ頃、都から呉典恩が戻り西門慶が山東提刑所副千戸という役人に就くことになったことを

知らせたので、西門家は二重の喜びに沸きたった。李瓶児の産んだ子は慶が役人になったことに因んで官哥と名付けられた。

十二 齣 開宴 西門慶が役人になったことと、息子の官哥が満一ヶ月になったことを祝って、山東防禦使の周秀、正千戸の夏龍溪、磚廠長官の劉内相それに親友の応伯爵らを招いて宴会をひらく。

十三 齣 留飲 ある日、西門家に都から任地にむかう途中の兩淮巡撫御史の蔡鞏と山東巡按の宋松原の二人が蔡太師の執事翟謙の紹介状をもって寄る。次第にこのような大官とも交際する西門慶であった。

十四 齣 欠。

十五 齣 聯姻 呉大舅（西門慶の妻呉月娘の兄）が仲人となって、西門慶の息子官哥と清河県きつての金持喬洪の娘とが許婚の約束をする。

十六 齣 雪夜 雪の夜、潘金蓮は空閑を託つ。そして西門慶の寵愛を一人占めする李瓶児に一矢報いるべく秘かに白獅子という猫を囲う。

十七 齣 求榮 ある日西門慶は、新任の山東巡按を同僚達とともに家で接待し、いよいよ官界での顔を広くする。

十八 齣 施藥 ある日西門慶は城外の永福寺で普静和尚と名乗る一人の異相の僧に出会った。実は、この僧は西域の靈僧万廻で、この度西門慶の煩惱を断ち悟りを開かせる為にここで慶の到着を待っていたのであった。僧はこの時、求められるままに精力増進の淫藥を西門慶に施した。

十九 齣 賭物 潘金蓮が日頃飼っていた猫が官哥に飛びつき顔を引っ掻いた為に、官哥はひきつけを起こし間もなく死ぬ。息子に先立たれた李瓶児は悲しみのあまり自らも病床に伏す身となる。

二十齣脈 李瓶児の病状は日を追って悪化する一方であつた。そこで趙龍岡と任後溪という二人の医者によばれて李瓶児の脈を診る。

趙龍岡はデタラメな医者で、西門慶はてんで信用しない。かくて任後溪の見立てと薬に一縷の望みをかける。

二十一齣法遣 李瓶児の病は一向に好転しない。万策尽きた西門慶は潘道士をよんで悪霊を祓わせる。すると亡き花子虚が李瓶児に祟っていたことが判明する。

二十二齣死孽 李瓶児がとうとう死ぬ。一方都からの知らせで夏龍溪は京官に栄転、西門慶は正千戸に昇進、呉典恩も巡検となる。李瓶児の死を悲しんでばかりおれない西門慶であつた。

二十三齣 欠。

二十四齣守靈 李瓶児の葬式も終つたあと、西門慶は亡き官哥の乳母であつた如意児に手を出し、これを寵愛する。

二十五齣夢訴 ある日西門慶が昼寝をしていると、夢に李瓶児が現われ、あの世で花子虚に訴えられ酷い目に遭つていると言う。

二十六齣憤憶 今や提刑所長官に昇進した西門慶が家で妻妾を集めて宴会するが、楽しいはずの宴席にかの李瓶児の姿のないのに西門慶は大いに傷心する。

二十七齣醉帰 ある日、西門慶は王六児（番頭韓道国の女房）を訪ね一戦まじえ酒を飲みかわして帰宅すると、門前で武大と花子虚の亡霊に出会い一刻も早く冥途に来るよう誘われる。家につくや待ちかまえていた潘金蓮から梵僧の媚薬を過量飲まされ、それで全身の力が抜け、以降病床につく身となる。

二十八齣慾喪 西門慶の病は一向に好転しない。ある日死を覚悟した彼は枕元に妻の呉月娘をよんで後事を托す。その直後、月娘が急に産気づいてその場より去るや、入れ換りにまたもや武大と花子虚の亡霊が現われ、慶に償いを迫る。するといづこともなく一人の僧侶が現われこの二人の亡者を追い払う。見ればかつて自分に淫薬をくれたかの普静和尚ではないか。慶は和尚にしきりに助命を嘆願するが、和尚は「これは貴殿のこれまでの行いの報いだから助からない。これより月娘の子供として生れかわり、十五年後に岱岳東峰で待つているから、その時ワシの弟子となるのだ」と言つて悟す。果して、西門慶が亡くなるのと呉月娘が一人の男の子を産みおとしたのと同時であつた。

右の梗概を見ても判る通り、この曲本はうちにいささかも水滸系武劇を含まず、「金瓶梅」の李瓶児を中心に作られた戯曲である。李瓶児が話の中心であるかどうかは読めばすぐに判ることであるが、その李瓶児に戯曲中「正旦」の脚色が与えられていることからこのことはつきりする。またこの曲本では、戯曲というジャンルの性格上登場人物も必要最小限に締つて少なくしている。

(2) 基づいたと思われる「金瓶梅」の版本

では、この「不登大雅甲本」が基づいた「金瓶梅」の版本は一体何だったのだろうか。

「金瓶梅」の版本は、知られるように大きく言つて、一、「金瓶梅詞話」と題し、冒頭に万曆丁未年の序のある「詞話本」（一名「万曆

本) 二、「新刻繡像批評金瓶梅」と題する「繡像本」(一名「崇禎本」) 三、「第一奇書」と題し、康熙乙亥年の序のある「奇書本」(一名「康熙本」)の三種類に分類される。

結論から言えば、この「不登大雅甲本」はこの「繡像本」ないしは「奇書本」に依って作られた戯曲と判断できる。その証拠を挙げるならば、

一、第十一齣冒頭にかかげられた「小院間培玉砌。墻隈半簇蘭芽。一庭萱草石榴花。多子宜男愛挿」という応天長の詞は、「繡像本」や「奇書本」の第五十三回冒頭に見える詞と同じであって、「詞話本」にはこの詞は見えず、同書五十三回冒頭には別の一詩がのせられている。つまりこのことから、「不登大雅甲本」は、少なくとも「詞話本」には依らず、「繡像本」か「奇書本」に依ったことが推察されるのである。

二、「不登大雅甲本」各齣の題目のつけ方が、「繡像本」ないしは「奇書本」に依っていること。

例えば、第六齣の許嫁という齣目は、「繡像本」十七回の回目が李瓶児許嫁蔣竹山(「奇書本」も同じ)なのに対し、「詞話本」十七回の回目が李瓶児招贅蔣竹山であることからして、これは「繡像本」か「奇書本」の回目に依ったと思われる。同様の例を挙げるならば、(下段の表参照) この他の各齣は、「金瓶梅」の三種の版本の回目がほぼ同じであるので、判断の材料にはできない。ただ、5齣の擅恩のみがこの三種の版本の回目がすべて異なる。まず、「詞話本」30回の回目は、来保押送生辰担であり、「繡像本」30回の回目は、蔡太師擅

齣目	相当する「金瓶梅」の回数	「詞話本」	「繡像本」	「奇書本」
13 留飲	36	西門慶結交蔡狀元	蔡狀元留飲借盤纏	繡像本に同じ
15 聯姻	41	西門慶与喬大戸結親	兩孩児聯姻共笑嬉	繡像本に同じ
17 求栄	49	西門慶迎請宋巡按	請巡按屈体求栄	繡像本に同じ
18 施薬	49	永福寺餞行遇胡僧	遇胡僧現身施薬	遇梵僧現身施薬
19 睹物	59	李瓶児痛哭官哥児	李瓶児睹物哭官哥	繡像本に同じ
21 法遣	62	潘道士解禳登祭壇	潘道士法遣黃巾士	繡像本に同じ
22 死孽	60	李瓶児因暗氣惹病	李瓶児病纏死孽	繡像本に同じ
24 守霊	65	宋御史結豪請六黄	守孤霊半夜口脂香	繡像本に同じ
28 慾喪	79	西門慶貪欲得病	西門慶貪欲喪命	西門慶貪慾喪命

恩錫爵(蔡太師恩を擅にして爵を錫う)なのに対し、「奇書本」30回の回目は「繡像本」のそれに似ているが、蔡太師覃恩錫爵(蔡太師恩を広く施し爵を錫う)とあって、このうち「不登大雅甲本」の齣目と符合するのは「繡像本」のみである。この一例のみを以って軽々し

く判断はできないが、「不登大雅甲本」の齣目のすべてが「繡像本」の回目と符号するので、「不登大雅甲本」が依つた「金瓶梅」の版本は、あるいは「奇書本」ではなく「繡像本」だったのかもしれない。少なくとも「詞話本」ではない。

(3) 欠けた齣目とその内容の推測

すでに述べたように、この「不登大雅文庫」蔵戯曲「金瓶梅」は、甲本も乙本もともに残欠本である。「不登大雅甲本」について見るならば、第一・第二・第十四それに第二十三の都合四齣が欠けている。それで次に、この欠けている各齣の内容と齣目を推測してみたい。

まず三齣で、西門慶が李瓶児に「我前日被武二追尋吃那一驚不小。費了無限打点。昨日才把他刺配孟州去了」（俺は先日武松のやつに追われて大層ビックリしたが、しこたま役所に賄賂を使って昨日ようやくヤツを孟州に追放ということにしたよ）と言っていたり、また李瓶児が西門慶に「官人連日少見。聞得娶了新人。把奴家就撇下不理了。（中略）官人新娶這位娘子、一定是美貌的。奴家時常聽見。他的声音甚是嬌媚得緊。（中略）他姓甚麼。可有小字麼。是官人第几房」（旦那さんお久しぶり、聞くところによれば新しいお妾さんをもらったってういじやないの。私のことなぞすっかりお見限りだったのね。（中略）旦那さんが娶られたこの方は、きつとお綺麗な方なのでしょうね。私はいつも聞いてますよ。その方のお声がとっても艶かしいって（中略）その方のお名前はなんとおっしゃるの。旦那さんの何番目の奥さんなの）と言うのに対し、西門慶は「前日偶然高興娶了。雖然不叫醜

陋。那里及得二嫂這段風流標致。（中略）他姓潘名字叫作金蓮。如今家中排他做第五房。（先日偶然興がわいて娶ったのだが、器量は悪いわけではないが、とても奥さんのような風流でお美しいのには及びませんよ。（中略）姓は潘、名を金蓮といつて、今家では五番目です）と答えていることから判断して、失われた第一齣は、たぶん西門慶が武大の妻金蓮を娶る内容だったと思われ、「金瓶梅」の九回の内容に相当するものだったと思われる。従つて「繡像本」の回目を利用して、第一の齣目を推測すれば、たぶん「偷娶」となる。第二齣の内容は、武松が都より戻り兄武大が西門慶と金蓮によつて毒殺されたことを知つて復讐を計るが、誤つて李外伝を殺してしまう内容だったと思われる。もしそうだとすれば、「繡像本」九回の回目から推察して、第二齣の齣目は「誤打」の二字だった可能性が高い。第十四齣は、その直前の第十三齣が「金瓶梅」三十六回の内容で、第十六齣が「金瓶梅」三十八回の内容に相当するので、この齣は、この間の「金瓶梅」三十七回の内容つまり西門慶が番頭韓道国の女房王六兒と通じる段と思われる。すでに梗概においても見たように、この劇のおしまいの方の第二十七齣に王六兒の名前が出てくるので、やはりこの齣あたりで彼女が登場するのが自然であろう。従つてこの齣の齣目はさしずめ「包占」かと推測される。では二十三齣の内容はどうだったのだろうか。これも前後から推測してみる。まず前の二十二齣では李瓶児の死があり、このあとの二十四齣では西門慶が故官哥の乳母如意児に手を出す場面であるので、この齣の内容は、西門慶が芝居を見て李瓶児を憶い出し落涙する一段だったかと推察される。もしそうだとしたら、この第二

十三齣の齣目はさしずめ「観戯」であつたらう。

(4) 筋展開上に見られる工夫

この戯曲の話の展開は、西門慶が李瓶児を手に入れその夫の花子虚を死に追いやることから始まって、李瓶児の出産とその子の死亡、つづいて李瓶児自身の病死、最後は西門慶自らが媚薬多量服用により落命するところで結ばれている。登場人物は最低限に絞りこみ、西門慶の第二夫人の李嬌児、第三夫人の孟玉楼、第四夫人の孫雪娥などは登場しない。また西門慶の取り巻きの遊び仲間、応伯爵と呉典恩の二人が登場するだけで、謝希大以下の八人の取り巻きは登場しない。さらに、「金瓶梅」後半部において活躍著しい娘婿の陳経済も登場しない。また筋立ても、直接李瓶児と関係のないものは一切省き、西門慶が下男来旺の妻の宋惠蓮に手を出し彼女を自殺に追い込んだことや、賄賂を得て主人殺しの苗青を無罪放免として釈放したことなどは、一切劇の筋にとりこまれていない。この「不登大雅甲本」は、いわば西門慶と李瓶児を中心とした内容に限定した引き締った劇といえる。しかし、この劇がいかにも引き締って感じられるのは、単に登場人物や筋立てを最低限に限定したことのみにとどまらず、主に次の理由からであろう。

第十八齣と最後の第二十八齣に普静という和尚が登場するが、これがこの劇を引き締めるのに大きな役割をしていると思われる。すでに梗概でも見たように、この僧はもともとインド出身の万廻という靈僧で、永福寺に立ち寄り西門慶を悟りに導く為にそこで彼を待ち、やっ

て来た慶に求められるままに淫薬を与えている。そして最後の齣では、潘金蓮に多量の淫薬を飲まされ瀕死の状態の西門慶の前に再び現われ、因果を論し、慶は呉月娘の産む男の子として生れ変わり、十五年後に師弟として再会しようと彼に印導を渡す。

さてこの普静和尚は小説「金瓶梅」を見ると、小説中の(一)四十九回に見える梵僧、(二)五十七回の万廻老師、(三)同じく五十七回の道長老、(四)八十四回の雪洞禪師、以上四人の僧を上手に併せて一人の人物に創り上げることが判明する。おもしろいことに、この小説中の四人の僧は、すべて永福寺に関係している。

まず(一)の四十九回に見える梵僧だが、彼は旅の僧で、逗留していた永福寺で西門慶に偶然遇い慶に淫薬を与えている。彼は戯曲中の普静と異なり、西門慶に何か悟りを開かせる為にこの薬を与えたのではなく、ただ求められるままに与えているのである。そしてその後この梵僧は小説中に二度と登場することもない謎の人物である。つまり小説では謎の梵僧による気ままな行為によって、いわばこの小説の主役が落命することになるという深刻な結末を招来したことにしている。また、この梵僧はここに一度だけしか登場しないので、読者にとって印象の薄い登場人物になってしまったのは否めない。

(二)の五十七回に見える万廻老師^③は南北朝梁の武帝の頃の人で、この永福寺を開いた開山の老師だったということになっている。だが、戯曲では、西門慶と同時代の北宋末の人で普静和尚の別称ということにしている。

(三)同じく五十七回に見える道長老というのは、永福寺の住持である。

彼は元来インド出身の僧で、行脚してこの寺に來たが寺のあまりの荒れ模様を見てこれを建て直したいと志す。そしてその再建の爲に、彼はお金と政治力のある西門慶に接近するとゆうふうにならされてある。戯曲中の普静は、この道長老よりインド出身の行脚僧という要素のみうけついでいる。

ところで知られる通り、現存する「金瓶梅」の五十三回から五十七回までは明らかに原作とは異なり別人が補った部分とされる。この道長老も、別の回の四十九回・六十五回・八十九回では道堅長老となっており、名前がすこし違ふ。

(四)おしまいは八十四回に見える雪洞禪師である。この人の別称は普静なので、戯曲の普静和尚は直接的にはこの雪洞禪師をうけついでいる。八十四回で泰山にお参りに來た呉月娘が土地のならず者に追われているところを助け、その際十五年後に息子の孝哥を和尚の弟子としてさし出すことを月娘に約束させる。百回で、金の侵攻により清河県から逃げ去ろうとする呉月娘の前に再び現われ、一緒に泊つた永福寺で、月娘にむかつて彼女らがこれから頼つてゆこうとする雪離守は決して頼るべき相手ではないこと、また孝哥こそ西門慶の生れ変わりであることなどを夢や幻覚を使って諭し、遂に孝哥の出家に同意させる。

小説「金瓶梅」では以上の(一)梵僧(二)万廻老師(三)道長老(四)普静和尚の四人の僧をそれぞれバラバラに何のつながりもたせずに登場させているが、この戯曲においては、特に(一)の梵僧が即(四)の普静和尚だとすることに於てその役割を単純明快なものにした。つまり、自らの荒淫と友人に対する背徳とによつて死という報いを受けるのだという因

果を西門慶にしっかりと悟らしめる役割である。また普静にこのような役割を持たせたことによつて彼は印象深い人間となつた。戯曲そのものも、これによつてシンプルで締りがあつかつわかりやすい筋立てになつたと言えるであろう。

(5) 作者について

では、この「不登大雅甲本」の作者は誰であろうか。すでに見たように、「不登大雅乙本」は「不登大雅甲本」の演出本と見られ、「芸戲研乙本」は「不登大雅乙本」と同じ戯曲の演出本を書きとつた別の一抄本と見られる。また、「芸戲研甲本」は「不登大雅乙本」や「芸戲研乙本」と元は同じ戯曲の一部で、前者は主に後半部を書きとつたものなのに対し、後者は前半部の一部を書きとつたもので、両者は互いに補完しあふ関係にあると見られるとは前述した通りである。要するに、以上の四本の戯曲抄本は同一のグループに属したものと推察される。實際この四本の戯曲すべてその齣目が二字によつて示されているのに対して、「古本戯曲本」の各齣目はすべて四字によつて示されている。このようにこの「古本戯曲本」はさきの四本の戯曲とすでに体裁の点で異なつてはいるが、更に内容的にも、前四本とりわけ「芸戲研」の二本は単に「金瓶梅」からだけでなく、うちに「水滸伝」からの話を挿入させていることが認められたが、それはあくまで飛雲浦とか十字坡といった武松物語の範囲内のことであるのに対し、この「古本戯曲本」の方は、うちに百二十回「水滸伝」の中の田虎征伐の話や、仇申の娘の瓊英とつづての名人の張清の話が織り込まれており、軽々に

断定はできないが、これらのことからこの両者の作者は別人である可能性が大いにあると思われる。

さて、従来「古本戯曲本」の作者を呉県の鄭小白だとされてきた。

莊一拂「古本戯曲存目彙考」⁽⁴⁾ 卷十一鄭小白の条には、

佚其名、江蘇江都人。「金瓶梅」、「曲録」著録。鈔本。「古本戯曲叢刊三集」本。(中略) 凡二卷三十四齣。演「水滸伝」。以西門慶・潘金蓮為関目。中間挿入張青・瓊英以及田虎事。とある。

また、郭英徳「明清伝奇綜録」⁽⁵⁾ 卷三の鄭小白の条によれば、

鄭小白、江都(今属江蘇)人。生年不詳。所撰伝奇二種、「金瓶梅」今存、「金庄瓶記」已佚。(中略)、「金瓶梅」、「伝奇彙考標目」著録。現存旧抄本。首卷前半卷・二巻後半卷、鄭振鐸旧蔵。首巻後半卷・二巻前半卷、傳惜華旧蔵。而款式・字体悉同、原当為一本。「古本戯曲叢刊三集」合而影印之。凡二卷三十四出。とある。

また、「北京図書館古籍善本書目」⁽⁶⁾ では、「金瓶梅」二巻、清・鄭小白撰。二冊、八行二十八字無格 と見える。

今、「古本戯曲本」を見ると、正に八行二十八字なので、この北京図書館蔵の戯曲「金瓶梅」は、「古本戯曲本」と同一のものと思われる。

以上を見ても判る通り、莊一拂氏や郭英徳氏ならび到北京図書館は、いずれも「古本戯曲本」の作者を鄭小白と判断しているのである。

だが、筆者が大いに疑うのは何故そのように断定できるかである。

第一、「古本戯曲本」のどこを見て作者鄭小白とは記していない。そもそも、生没年を始めとしてその生涯は皆目不明の鄭小白なる人に戯

曲「金瓶梅」という作品があると今に伝えるのは、清・無名氏の「伝奇彙考標目」⁽⁷⁾ に

鄭小白、未著其名、呉県人。「金瓶梅」⁽⁸⁾。

と書かれてあるのみで、これが二巻三十四出のものだともどこにも書いてないのである。また同書の注として、この「伝奇彙考標目」別本に、

鄭小白(江都人)補、「金庄瓶記」明刊本二冊。見李氏「海澄樓書目」。

とあるのみなのである。

すでに今、不登大雅文庫蔵の戯曲「金瓶梅」も広く世人の目にとまるようになった現在、この「不登大雅本」それも特に「不登大雅甲本」の作者が鄭小白だった可能性も排除できないのではあるまいか。とは言え、今の所「不登大雅甲本」の作者が鄭小白であるという確たる証拠はどこにもないので、この詮索はしばらくおくこととする。

さて、この鄭小白は呉県ないし江都の人というだけで他のことは一切不明である。かつて澤田瑞穂氏が、清の兪蛟の「夢厂雜著」卷二に見える鄭少白伝をとりあげられ、小白と少白の一面の違いこそあれ、あるいはこの人ではなからうかとされた。この「鄭少白伝」によれば、この人の本名は鄭琨、字は睦堂、号は少白。紹興府蕭山県の人で、幼少より伯父に育てられ、その伯父が山西介休県令になるとその伯父の下で会計事務に従事したとある。

さて問題は、この鄭琨という人は本当に「伝奇彙考標目」に見える戯曲「金瓶梅」の作者鄭小白なのだろうかということである。「伝奇

彙考標目」に見える鄭小白は呉県の人というから今の蘇州の人である。その別本に江都の人とあるので、それなら揚州近郊の人ということになる。この鄭琨は蕭山の人というからには杭州近郊の人である。一は蘇州、一は揚州近郊、また一は杭州近郊と違うと言えは違うが、広い中国からすれば、あまり違わぬ同じ蘇杭の人ということになる。この点で鄭琨は鄭小白かとも思えるが、では、この鄭琨がいつ頃の人かということが問題であろう。

この「夢」雑著」の「鄭小白伝」を更に見ると、この人は伯父の下で会計事務をしていたがそれが嫌でたまらず、会稽の梁階平という人に師事して科挙をめざしたことが書かれてある。そうすると、この鄭琨がいつ頃の人かを定めるにあたっては、この梁階平という人が有力な手掛りになるはずである。調査の結果、梁階平は梁国治のことで、「清史稿」卷三百二十梁国治伝に依れば、乾隆十三年の進士、乾隆五十年に戸部尚書までなり、その翌年の乾隆五十一年に卒したことが判った。とすれば、この梁国治はほぼ乾隆年間（1736～1796）の人と言える。通常の觀念からすれば、この梁国治に師事した鄭小白は梁国治より若いはずだが、それでも、もし仮に鄭小白は梁国治と同年齢だったと仮定しよう。さて、この鄭小白が、鄭小白と同一人物ならば、彼には別に「金庄瓶記」という戯曲があり、その明刊本もかつてはあったという。惜しいことに今この明刊本は残っていないが、もし鄭小白が明最後の年の一六四四年に二十才の齡でこの「金庄瓶記」を出版したとすれば、その彼が乾隆元年の一七三六年にはすでに百十二才になる計算となる。つまりこれはあり得ない話で、残念ながら「夢

「雑著」に見える鄭琨が戯曲「金瓶梅」の作者鄭小白である可能性は極めて低いと言わねばならない。

まとめ

「明清伝奇綜録」の著者郭英徳氏も、鄭小白に今は佚したが「金庄瓶記」という明刻本があったということから、この人は明末清初の人でなかったかとし、明の天啓元年から清の順治八年までの伝奇勃興期（下）の中に入れて彼を紹介している。

ここでもし筆者の大胆な仮説を申すならば、この明末清初に生きた蘇杭の人鄭小白は、恐らく崇禎末年杭州で出版された「繡像本金瓶梅」を基にして一篇の戯曲を書きあげた。それが今に残る「不登大雅甲本」であり、「不登大雅乙本」や「芸戲研甲・乙本」はいずれもその演出本だった。だが、既刊の「古本戯曲本」の作者は恐らく別の人であろうというのだが、いかんせん、すべてはまだ証拠不足で仮説にすぎない。いずれ将来新しい材料の発見により根拠を得て、以上の仮説を実証したいものと念じている。

〔注〕

- (1) 澤田瑞穂著「宋明清小説叢考」一九八二年、研文出版社刊所収。
- (2) 「不登大雅乙本」は、目次の題目と実際の題目が異なっている齣がある。カッコ内は実際の題目を示す。
- (3) 唐の高祖朝から玄宗朝にかけて活躍した高僧。彼に関する不思議な逸話は、長く仏教徒の間で語りつがれてきた。その逸話の大半は、「太平広記」卷九十二に見える。

- (4) 莊一拂編著「古典戯曲存目彙考」一九八二年上海古籍出版社刊、中冊 一二四九頁。
- (5) 郭英德編著「明清伝奇綜録」一九九七年河北教育出版社刊、上冊四七三・四七四頁。
- (6) 北京図書館編「北京図書館古籍善本書目」一九八七年書目文獻出版社刊、集部三千八十頁。
- (7) 「中国古典戯曲論著集成」(一九八〇年中国戯劇出版社刊)第七冊所収。
- (8) 王国維「曲録」に、「金瓶梅」一本、国朝鄭小白撰、小白佚其名、江都人。とあって、これを「伝奇彙考」から引用したと見える。しかし、今これを一九一四年古今書室刊石印本「伝奇彙考」八巻を調べるが、どこをさがしても出てこない。青木正児「支那近世戯曲史」附録曲学書目摘要の「伝奇彙考」の備考を見ると、「此書王国維・董康氏等各旧鈔残本を得、京都帝国大学之を借鈔す。後上海古今書室の石印本出でしも、鈔本に比すれば足らず」とあるので、あるいは抄本「伝奇彙考」の方に「金瓶梅」が見えるのかもしれない。
- (9) 澤田瑞穂著「宋明清小説叢考」による。注(一)を参照されたい。

(あらき たけし 中国学科)
二〇〇四年十月十五日受理